

●東京子ども図書館のあゆみ →<http://www.tcl.or.jp>

- 1955 土屋児童文庫はじまる（土屋滋子主宰・世田谷区上北沢）
- 1956 入舟町土屋児童文庫はじまる（土屋滋子主宰・中央区入船）
- 1958 かつら文庫はじまる（石井桃子主宰・杉並区荻窪）
- 1967 松の実文庫はじまる（松岡享子主宰・中野区江原町）
- 1974 東京都教育委員会より、財団法人東京子ども図書館の認可を受ける
- 2010 内閣総理大臣より公益財団法人東京子ども図書館として認定される

- ・子どもたちへの直接サービスのほかに、“子どもと本の世界で働くおとな”のために、資料室の運営、出版、講演・講座の開催、人材育成などを行っている。公的資金に頼らない私立図書館として、事業収入と寄付収入により運営。

●子どもの本と児童図書館の充実を願って

- ・私設の図書室はたいへん力のよわいものです……公共児童図書館を充実させることは、それこそ「焦眉の急」のように思えます……よい図書館には、年齢も性格もさまざまな子どものためのよい本があり、それを子どもに結びつけるだけの力と経験をもった図書館員が必要です。 ～『子どもの図書館』石井桃子 岩波新書 1965年
- ・子どもの読書が、質のよい書物を得て、より充実した内容をもつ営みとしてなされるようにというのが、わたくしたちの願いであり、子どもの読書生活の基本的な場としての図書館の充実、発展をはかることによって、子どもの心のすこやかな発達を助けるのがわたくしたちの活動の目的です。 ～1974年 東京子ども図書館設立趣意書より抜粋

●講演・講座・人材育成事業

- ・主な講演会
- 1974.5 幼児とお話 石井桃子
- 1974.7 グリム昔話の夕べ 野村法
- 1975.4 子どもの本の国際交流 渡辺茂男
- 1976.10 子どもと本 / 児童図書館員のためのセミナー アイリーン・コルウェル
- 1977.6 講演会 中野重治
- 1977.12 子どもにとって昔話はなぜたいせつか ブルーノ・ベッテルハイム
- 1982.2 頭で読むこと 心で読むこと 子安美知子
- 1984.5 こども・こころ・ことば 松岡享子

- 1984.10 十周年記念シンポジウム「図書館と文庫の接点をさぐる」
- 1993.9 大きな図書館の中の小さな図書館 シビル・A・ヤグッシュ
- 1994.5 私の絵本作り マーシャ・ブラウン
- 1998.5 私を鍛えてくれた子どもたち 中川李枝子
- 2009.11 中国の昔話「九人のきょうだい」をめぐって 君島久子
- 2015.2 石井桃子さんの戦後——子どもの本と農場、二つの開拓期 尾崎真理子
- 2017.3 エドワード・アーディゾーニの絵本 吉田新一

・お話の講習会：月1回、2年間にわたって、子どもにお話を語ることの基本をじっくり学ぶ講習。1974年の設立当初から始まり、950名を超す修了生が全国で活躍。

・子どもの図書館講座：子どもと本を結ぶ活動について、多角的に学ぶ連続講座。

- 第1期 「子どものための図書館の使命と役割を考える」1998.9～1999.3
- 第2期 「本が図書館に届くまで（出版と流通）」1999.4～10
- 第3期 「児童室の蔵書を考える」1999.11～2000.7
- 第4期 「絵本グループで読み聞かせるために」2000.10～2001.7
- 第5期 「識字について考える」2001.9～12
- 第6期 「わらべうた—心地よいことばとの出会い」2002.9～2003.3
- 第7期 「幼い人のことばを紡ぐ—わらべうた」2003.6～7
- 第8期 「イギリス児童文学作品を通して子どもの本を考える」2003.9～2004.3
- 第9期 「次世代の児童図書館員のために」2004.5～2005.3
- 第10期 「児童図書館員として読むべき基本図書のリストをつくる」2005.4～11
- 第11期 「学校図書館の現場から」2006.5～11
- 第12期 「読み聞かせ—あなたは何を読んでいますか？」2007.7～10
- 第13期 「ブックトークこの1冊から—あなたはどう紹介しますか？」2008.11～2009.3
- 第14期 「蔵書を活かすブックトーク」2009.10～2010.3
- 第15期 「いま、子どもの本をつくる・届ける」2010.9～2011.5
- 第16期 「児童図書館サービス・基礎コースⅠ」2011.9～2012.3
- 第17期 「児童図書館サービス・基礎コースⅡ」2012.6～2013.3
- 第18期 「瀬田貞二氏の仕事—『児童百科事典』と3つの評論集を読む」2013.5～2014.1
- 第19期 「今、図書館で何ができるか」2016.7～2017.2

・研修生制度：年間1～2名を受け入れ。週5日・35時間、当館の児童室、かつら文庫、および資料室で実際に働くことにより、子どもに対する図書館奉仕と、それに関連したおとなへの奉仕を具体的に学ぶ。

- ・児童図書館員のための初級研修プログラム：児童図書館員を目指す方を対象に、通年で開催する連続講座。今年度カリキュラムは以下のとおり。

	内 容	
第1回	オリエンテーション	児童室の運営とサービスの実際
第2回	日本児童図書館の黎明期	アメリカの児童図書館の先達
第3回	学校図書館の運営	選書と蔵書構成
第4回	わらべうた・子どもの文学 としての昔話	読み聞かせ
第5回	お話の実習	基本的な本を読む1 フィクション・幼年
第6回	ブックトークの実習1	基本的な本を読む2 フィクション・中高学年
第7回	ブックトークの実習2	基本的な本を読む3 伝記
第8回	基本的な本を読む4 ノンフィクション	まとめ

●出版事業

- ・主な出版物

「おはなしのろうそく」シリーズ 1973年～ 既刊31巻

語り手のテキストとして、総発行部数177万部のロングセラー

「愛蔵版おはなしのろうそく」1～10 子ども向きの編集・装丁

『今、この本を子どもの手に』東日本大震災復興支援「3.11からの出発」の一環として編集

「児童図書館基本蔵書目録」1『絵本の庭へ』2012年（絵本1157冊）

2『物語の森へ』2017年（児童文学、昔話、詩など1600冊）

3『知識の海へ』（ノンフィクション 未刊）

「ブラジルのむかしばなし」1～3 在日日系ブラジル人の子どもたちへの読書支援活動から生まれた日本語・ポルトガル語併記のお話集

機関誌「こどもとしょかん」（季刊）内外の評論や当館の講習会、研究活動から得られた成果を掲載。現場の図書館員による書評、名誉理事長・松岡享子の随筆などの連載。

●今後の展望と課題

- ・この半世紀の間に、図書館数、児童サービスの実施数、蔵書数、利便性は飛躍的に伸びた。今後はサービスや蔵書の質の向上が課題。そのために解決すべきは“人”の問題。
- ・児童図書館員の専門性の確立
自己研鑽を惜しまない意欲のある人材は豊富。この人たちが数年で異動する現状を変え、長期的視点のもとに雇用され、安定した人事環境で育成されることが望まれる。

- ・図書館員教育の充実

司書講習での児童サービス：2ヵ月講習 24 単位のうち 2 単位のみ。

cf.アメリカ；2年間で5科目以上、ストーリーテリング、ブックトーク、書評の実習、児童室の管理・運営について、見学、討論を交え徹底して学ぶ大学院レベルのコース

- ・ボランティアは、専門知識・技能を備えた正規職員による指導・管理のもとに活用。
- ・読書習慣の形成は、幼いころからの日々の営みを、楽しみのうちに重ねることが肝要。保護者への啓発はもちろん、子どもに関わるさまざまな機関・団体の連携を促進する必要がある。その際、日本語を母語としない子どもたちへの配慮も望まれる。

- ・司書を専門職にとは、もう何年も前から叫ばれているにもかかわらず、一向に改善されないのはなぜでしょう。……昨今、財政難を理由に、少なからぬ数の自治体が、図書館の運営責任の一部、または全部を放棄して、民間の団体や企業に「委託」する動きが出ているからです。サービスを本来の使命とする図書館と、営利を目的とする企業が、どこで折り合いをつけられるというのでしょうか。……この“人”の問題を抜きにしては、図書館も児童サービスも、前へ進むことはできないと思います。

～『子どもと本』松岡享子 岩波新書 2015年